熱血の蘭医ポンペ ―第3回―

香取 淳

咸臨丸難航図　鈴藤勇次郎原画（横浜開港資料館所蔵）

六、訓練航海で薩摩に

海軍伝習所の分室ともいえる高島秋帆邸跡で近代医学の講義に明け暮れるポンペであったが、春に九州を一周する航海訓練に誘われた。この訓練を企てたのは、新たに伝習所の総監に就任した木村図書（ずしょ）である。それまでの第一次伝習所では多くの生徒が丸山の遊郭に入り浸るなど、風紀が乱れに乱れていた。しかし、前任の総監永井玄蕃守や長崎奉行所も彼らを別格扱いして、特段の取締りは行っていなかった。

そこで図書は、長崎奉行の岡部長常にも協力を求めて、生徒らの風紀の引き締めに取り掛かる。同時に、狭い宿舎に大勢の生徒を押し込めておくことが悪所通いの一因になっていると考え、伝習所の近くにある空き屋敷を借り上げ、生徒らの住環境の改善にも着手した。さらに長崎周辺の狭い海域に限られていた訓練航海を、他藩の港湾をも含めた広い海域で行えるように工作。生徒の目を広い世界に向けさせると共に、操艦技術の向上を目指した。

この図書の企てに江戸幕府も理解を示し、訓練に咸臨丸を使用することを承認。長崎に近い主な藩も、競うように咸臨丸の入港許可を幕府から取り付けていた。

四月下旬に、咸臨丸は矢田堀景蔵（けいぞう）と勝麟太郎の指揮の下に長崎港を出て、最初の寄港地である平戸に向かった。この練習艦にはカッテンディーケをはじめポンペ、松本良順、ハルデス、トローイエンたちも乗り込んでいる。穏やかな海を滑るように北上した艦は、狭い平戸海峡を通り抜けて、島の北端にある田助湾に錨を投じた。

湾と同名の田助村には、湾の周囲を取り囲むように民家が立ち並び、長崎と同じように素晴らしい景色を織りなしている。上陸したポンペたちは、村の至る所で友情に溢れる熱い歓迎を受けた。村人たちは初めて見る蒸気船に湧き立ち、一行の停泊を少しでも快適なものにしようと心憎いほどの〝おもてなし〟をしてくれる。

平戸に上陸したオランダの士官たちには、是非、行ってみたい所があった。それは今から2世紀半前に、最初に来日したオランダ人が住んだ土地と、そこに建てられた商館跡を訪れることである。

ポンペたちは陸路を南に下って、目的の地に歩を進めた。道中の至るところで村人たちの歓迎を受けたが、困ったことに野次馬が多くて、一行を困らせた。途中で歩を休めたとき、下士官の一人が若い娘たちに指輪を与えた。するとその娘たちはあられもない格好で一行の後からついてくる。それも胸を露わにして……である。下士官たちがいちばん美しい娘に、もっともきれいな指輪を与えたことがわかると、何人かの娘は大胆にもそばに寄ってきて、白い胸をはだけ、やわらかい手を触らせ、自分こそが一番美しい指輪を貰う権利がある……と無言のうちに訴えようとしたのである。

平戸の娘に限らず、日本人は人前に裸身を晒すことをためらわないし、恥ずかしいとも思わない。長崎の町中でも風呂屋はどこも混浴であり、人々は熱い湯に長い時間をかけて浸かっている。そして風呂上りには、エビのように赤くなった身体を冷ますためか、男はもとより若い女性であっても裸で

街中を歩いている。その習慣も開国により外国人が増えてくると、少しずつ変わってきたが、男女を問わず裸身で公道を歩くことに抵抗がないようである。

小一時間ほど歩いたところで出会った村人に、２００年前にオランダ人が住んだ場所を尋ねてみた。すると、そこは平戸城の近くであるが、いまは何も残っておらず、青草が茂っていると言う。そのような廃墟は次の機会にして、一行は平戸の城下で古い寺院の参拝などをして引き返した。平戸に二日停泊した訓練艦は田助湾を出て、次の寄港地である下関に向かった。

玄界灘を北東に航行した艦が下関海峡に入ると、両岸に点在する長閑（のどか）な町や村が見えてきた。それらの中で一段と目を引くのは小倉と下関の町である。ブリッジから両岸に目を凝らしていたポンペやカッテンディーケたちは、「ここはトルコ北西部にある海峡とよく似ている……」などと話すうちに、訓練艦は下関の港に入った。港内は活況を呈していて、夥しい数の和船が係留されている。

艦から降りた士官たちは、通称〝オランダ館〟と呼ばれている屋敷に案内された。そこは二世紀以上も前から先輩に当たる商館長たちが江戸参府時に泊まった屋敷だという。ポンペが割り振られた部屋に入ると、扉や柱のあちらこちらに先輩たちが刻んだ刀痕とか名前などが見られた。宿の設備はおおむね良好であったものの、畳の上での暮らしは経験したことがない。そこで、艦から寝具や椅子とテーブルなどを運び入れ、コックや召使にも働いて貰わなければならなかった。

屋敷の主や接客の係たちは一行が快適に過ごせるようにと出来る限りのもてなしをしてくれる。朝食の折に、士官の一人が「お茶に牛乳が入っていない」と注意した。すると奥に入った係は数分後に、「ただいま女が絞ったばかりのものです」とコップ一杯の乳を差し出した。如何様にして入手したかものかは解らないが、その心遣いが士官たちにはうれしく思えた。

下関は人口が４万人ほどの町で、ポンペたちは自由に市街を見物して歩くことが出来た。しかし、平戸のときと同様に、

宿から一歩踏み出すと、またたく間に大勢の野次馬に取り囲まれてしまう。そのため、オランダ人だけで外出することは困難であり、役人たちに前後を警護されての外出となった。一行は阿弥陀寺をはじめ、町の神社仏閣を詣でたが、先輩の商館長が一見の価値ありと記している有名な尼寺は廃墟になっていた。市街地から江戸に続く西国街道(旧山陽道)にも足を延ばしたが、道幅は広く、実に立派な道路である。とくに目を引いたのは田園の美しさ、それに街道の見事な松の並木には感嘆するほかはなかった。

散歩の途中で、江戸に向かう肥後藩主 細川斎護(なりもり)の大名行列に出遭った。噂には聞いていたが、大名行列を実際に見るのは初めてのことである。先頭から槍持ち、鉄砲持ち、供回りの侍、刀持ち、旗持ちに上級武士など、その人数は千を超え、行列の長さは延々半マイル(約8百メートル)にも及んでいる。案内の日本人は、「皆様も土下座を……」と言って地に這いつくばったが、ポンペたちは御免こうむり、道端に立ったまま見物。輿(こし)に乗った肥後公は、髪や目の色が違う異人たちに気がついた時、少しばかり驚いた表情を見せたが、ポンペや士官らが黙礼をすると、愛想よくそれに応えた。

下関に二、三日間滞在した一行は、屋敷のベッドやテーブル・椅子などを艦に戻して、下関港を後にする。次の寄港地は鹿児島で、藩主の島津侯から「是非にも……」と前々から要請を受けていた。訓練艦は黒い煙を吐いて四国と九州のあいだを南下、24時間後に佐多岬の沖で右に旋回し、聳え立つ開聞岳の麓にある山川港に投錨した。

この湾は、規模は小さいものの水深は数百メートルもあった。恐らく噴火口に海水が流入して出来たものと思われる。ポンペやオランダの士官たちは艦を降りて、一時間余り湾の周辺を散策した。美しい渓谷に姿かたちが異なる藪陰や小川、さらにこぎれいな農村が点在し、幽遠な景色を織りなしている。ポンペは、これまでに見たこともない光景に深く心を奪われ、あたかもエデンの園にいるかのような気分に陥った。

煙を吐く訓練艦の来航を見て、この地に別荘を持つ島津侯

の家来が本邸に早馬を走らせた。藩主の島津斉彬（なりあきら）は、早速、使者を艦に遣わし、「殿様は皆さまのご来訪を大変喜んでおられます。明日、艦まで出向くとのことです」と伝言。翌朝の九時には、斉彬侯を乗せた船が山川港に到着。カッテンディーケは矢田堀景蔵と勝麟太郎らと相談して、２１発の礼砲を放った。斉彬は藩主であるばかりか、江戸の徳川家に篤姫（あつひめ）を嫁がせた〝将軍の義父〟でもあったからである。

軍服で盛装したオランダの士官たちは甲板に直立して、藩主の斉彬侯とその家来たちを迎えた。その際に、ポンペたちが驚いたのは、藩主もその部下も衣服が信じられないほど質素であったことである。後で知ったが、斉彬侯は日頃から質素倹約を信条として、贅沢を最も忌み嫌ったという。

斉彬侯は艦内を心いくまで視察した後に、船室でオランダの士官たちと食事を共にした。侯の希望は、「貴賓用の特別食ではなく、普段の食事を試食させてくれ」ということなので、いつもの昼食を準備。オランダ士官と共にテーブルを囲んだ斉彬侯は、その食事に大変満足の様子である。

斉彬侯の後ろには重臣たちが控えていて、ポンペらに矢継ぎ早の質問を浴びせかけてくる。中でも、坊主頭の松木弘庵（こうあん）医師は自然科学の理論にも実用面にも長けていて、質疑応答をしていると多くの学問を積んでいることがよく分かった。弘庵はオランダ語の教師兼翻訳者であり、流暢な会話は別として、オランダ語の読み書きは舌を巻くほど堪能かつ正確であった。

斉彬侯は船内の至る所を熱心に見学していたが、夕刻、艦を去る際に「我が居城にも二、三日滞留しては如何か」と一行を招待する。それは願ってもないことなので、実質的な艦長であるカッテンディーケは「喜んでお伺いしましょう」と応えた。

翌朝、山川港を出た艦は、昼過ぎに鹿児島港に到着。その港は規模が大きく、大型船も接岸することができる。湾内には多くの船舶が停泊し、石材製の埠頭には大勢の人々が行き来していた。塁壁に囲まれた街の防備は堅固で、無数の銃眼が見られたし、二、三の堡塁（ほうるい）には１５０ポンド砲が備えられ

ている。オランダの士官たちは小さな田舎町と思っていたが、予想をはるかに超えた大きな町で、人口は５０万人にも及ぶという。

上陸した一行は、出迎えた藩の役人の先導で宿舎に向かった。しかし、夥しい数の野次馬が一行を取り囲み、埠頭から幾らも進まないうちに身動きが取れなくなった。ポンペらがもみくちゃにされていると、妙なものが頭上をかすめてゆく。それは草履（ぞうり）であったり、生きたウナギであったり。日本の野次馬には慣れてきたものの、鹿児島の民衆は役人の指図を無視して暴徒化している。それでもオランダの士官たちは腹を立てず、「これは歓迎の印に違いない」と悠長に構えていた。

翌日は、騒ぎが大きくなり事故などに繋がらないようにと藩はポンペらに外出を控えさせ、一行を小型の船舶に乗せた。その船は、全長１５メートルほどの銅張の木造船で、蒸気機関が装備されている。これは医師の松本弘庵が、オランダ語の書籍に載っていた図面だけを頼りに設計して建造したものであるという。初めての和製蒸気船と言えるが、蒸気機関に欠陥があるため、本来であれば１２馬力は出る筈であるが、ほんの二、三馬力しか出ない〝のろのろ船〟であった。

その和製蒸気船で、役人は一行を「半月砲台」と呼ばれる土盛りの表面を石で固めた砲台に案内。そこには各種各様の大砲が砲架に載っていたが、特に１５０ポンド砲の出来栄えは素晴らしく、日本人が短い間に鋳造（ちゅうぞう）技術を完成させたことにオランダの士官たちは舌を巻いた。

一行は小型船に戻って鹿児島の市街地から離れ、郊外にある広い工場を見学。その工場は藩候が自ら建てた工場で、大仕掛けにいろいろな工業が営まれていた。先ず、目を引いたのは、裏山を流れる小川から引き込んだ用水で回転する夥しい数の水車。この水車を動力源に用いて、ガラス工場（そこでは多種多様なガラスを吹いたり磨き上げたり）、高炉のある鎔鉱炉、これに連絡する鋳造工場、大砲や銃器を製造する特別の部門などがフルに稼働していた。

とりわけポンペが注目をしたのは、実物大の木製蒸気機関を作る工場であった。技術者にその使い道を尋ねると、完

成品を鋳型にして、金属で鋳込むのだと言う。専門の士官ハルデスが製作中の機関を見て色々とアドバイスをしたが、工場の技術者たちは彼の忠告を一言たりとも聞き逃すまいと耳をそばだてる。そして、この工場の目的を問うと、蒸気機関等の試作や実験を何度も繰り返しながら、外国に依存することなく、独力でヨーロッパの科学技術レベルに到達したい……と責任者は目を輝かせた。

自ら案内役を買って出た工場長の家老や医師の松木弘庵からの情報によると、この2千人もの人が働く大工場の建設は、出島の医師ブルックに負うところが大きいという。第一次海軍伝習所に訓練生として派遣された松木弘庵らは、ポンペの前任者であるブルックから最新の科学知識や技術、とりわけ蒸気機関の原理や構造を詳しく学んだ。さらに、近代的な工場建設に必要となる情報や知識も聴取して、それを基本に帰藩後は蘭書だけを頼りにこの大規模な工場を作ったのである。

その一方で、出島におけるブルックの立場は微妙なものになっていた。言うまでもなく、海軍伝習所は幕府が海軍を創設するために幕臣を教育する場であった。その伝習所には他藩の希望者も特別に許されて、松木弘庵らは参加をしていた。前述したように、ブルックは医学には殆ど興味はなく、もっぱら物理や機械学の教育に熱心である。ところが、江戸から来た幕臣たちは〝箔をつけるため長崎にやってきた〟という輩が多く、学習意欲は極めて低かった。軍艦の操舵や大砲の打ち方以外の物事にはまったく興味を示さない。その結果、ブルックの講義に参加するのは、薩摩藩や鍋島藩など、幕臣以外の生徒だけに限られた。集まった他藩の生徒らは熱心に講義を聴き、講師のブルックも生徒たちの熱意につられて日々講義に熱を入れてゆく。

そのようなブルックの取り組みに、隊長のハルデスや商館長であったクルチウスは眉をひそめた。海軍伝習所の主たる目的は、幕臣の海軍教育である。ところが、医師のブルックは他藩の生徒を相手に、科学や機械学の教育に情熱を傾けている。この実態が江戸幕府にまで知れ渡ると、日蘭関係に

悪影響を及ぼし兼ねない。そこで、隊長のハルデスは「他藩の生徒だけを相手にした講義は止めるように」と忠告をした。ところがブルックは、「西洋の近代科学を教えて、日本を早く鎖国から目覚めさせよう」というオランダの国是に自分は最も適ったことをしていると主張する。ハルデスで駄目なら最高責任者のクルチウスから……と注意を繰り返すが、ブルックの信念は固く、揺らぐことはなかった。

かくしてブルックと隊長、商館長との関係は悪化の一途を辿り、ポンペが来日したときには険悪な関係に陥っていた。医師のブルックは、薩摩藩にとっては大恩人であっても、第一次海軍伝習所の内部においては困った存在になっていたのである。ポンペは、来日時にブルックが示した頑なな態度を思い出しながら、目の前の工場をこれほどまでに到達させた功績の大半はブルックにあると思った。そして、一行がここ数日の間に実見したことから、次のような予言ができると考えた。

――この藩は、日本が国運を高めていく源となるものを創出し、自力で技術革新に取り組む名君のもとで、燦然（さんぜん）たる頂に到達することが出来るであろう。さらに開国直後の混乱が収まり、ヨーロッパ人と自由な交流が始まれば、日本のうちで最も強力かつ繁栄した藩になることは間違いないし、その予言はすでに実現しつつある……。

この期待を込めた予言に反して、一行が去った三ヶ月後に、薩摩藩では大きな政変が起こった。藩主の島津斉彬侯がコレラに倒れて急逝してしまうのである。藩侯ひとりに限らず、その妻子までもが後を追って急死したことから、そこには何らかの犯罪が存在したのではないか……、とポンペらは疑念を抱かざるを得なかった。

七、コレラとの戦い

訓練航海から帰って来たポンペには、再び多忙な日々が待っていた。彼が、日本人の患者を直接診察できるようになると、診察を望む者が加速度的に増えてきた。人口６万人の長

崎の民衆だけでなく、九州や日本中から沢山の患者が押し寄せてくる。加えて、遠方の藩からも手紙で依頼が来るので、それらには手紙で返事を書かなければならない。さらに、長崎港に入ってきた外国船の怪我人や病人もポンペに診療を依頼してきた。

中でも目立つのは、六月中旬に寄港したロシアの戦艦アスコルド号のケースである。この戦艦は下田に向かっていたが、乗組員およそ５００人のうちの２５名ほどが体調不良や関節痛を訴えたため病兵は長崎で下船、近くの寺に収容されてポンペの診察を仰いだ。その結果、船乗りに特有な壊血病と診断され、ポンペの適切な治療で回復している。

翌七月に、今度はペリー艦隊の一つであるミシシッピー号がシナから日本にコレラを持ち込んできた。日本におけるコレラの流行は、文政五年の山陰・山陽、畿内における流行以来３６年ぶりである。文政五年のときは、どこから侵入したものか解らなかったが、今回はポンペが侵入・流行を予見した。彼は、上海から届いた新聞で〝シナでコレラ流行〟のニュースを読み、日本におけるコレラの大流行をいち早く予測したのである。

鬱陶（うっとう）しい梅雨空が続くある日、講義を終えたポンペが良順に話しかけた。

「先ごろ、上海でコレラが大流行したという話を新聞で読んだが、早晩、日本にもやってくるだろう。日本ではこれに対処できる用意があるのか？」

良順はその病気の症状―激しい下痢と嘔吐、痙攣（けいれん）等と数日以内の急死―を詳しく聞いて、口を開いた。

「それは日の本では、三日古呂利（ころり）とか霍乱（かくらん）と言われたものでござろう」

その場にたまたま居合わせた通詞の吉雄圭斎が続けた。

「何十年か前に九州から大坂にかけて流行った三日トンコロという疫病があり申す」

「恐らく、それらはコレラ病に違いない。もし、今日明日にでも長崎に侵入してくるようであれば、危険極まりないことになる！」

「ポンペ先生、何か打つ手があり申すのか？」
「松本君、ここで議論をしている場合ではない。講義は一両日中取り止めとし、明日からは君も我家に来てくれ。この病気の治療や流行防止の策を練ろう！」
翌日、松本良順は約束通りに出島のポンペ邸を訪ねた。ポンペは良順を図書室に誘い、独仏英語の医学書を書棚から取り出す。そして、コレラに関連した個所をノートに書き出し、良順にも意見を求めた。しかし、オランダ語に訳された医学書の記述はどれも似通っていて、治療法が曖昧であるばかりか、その根拠も乏しかった。
「この英書に載っているイギリスのウンドルリフの論文だけだね、信用できるのは」
二日目の午後になって、ポンペは〝結論が出た〟という表情を浮かべて良順に言った。
「この本の著者は、英領インドの病院長を長く務めた医師だから、コレラ患者に接する機会が多かったのだろう。病院や病床で観察した様々なことを詳細に書き記している。正直で飾り気のない文章も信用に値するね」
良順は、ポンペの淡々とした言葉に何度も頷いた。いままでヨーロッパの書物であればすべて正しいものと鵜呑みにしてきたが、実際は違うようである。医学書を読む際には、その著者の人となりや経歴をよく吟味したうえで読むこと。一人の医師が世界中の病気を診察し、治療することは不可能なので、先人の説に従わざるを得ないが、ポンペはその際の心得を示唆している……。それに気付いた良順は、改めて師としてのポンペに敬服の念を抱いた。
ポンペの予見はものの見事に的中して、七月に入って間もなく恐ろしいコレラ病は長崎の町に侵入してきた。ポンペは、先日の医学書を参考に、マラリアに効くキニーネと麻薬の阿片を同時に投与、さらに入浴で体を温める治療法を編み出し、医学伝習所に押し寄せてくる患者に試していく。そして、生の魚や野菜などの摂取を禁じるコレラの予防策を明確に示して、長崎奉行所に次のような書状を送り付けた。
――この両３日中に出島及び市中に、激しい下痢と嘔吐を

同時に訴える患者が多発し、昨一二日だけでも３０人もの発病があった。さらにアメリカの蒸気船ミシシッピー号においても類似した腹病が多数発生していることから、右の病気は極めて流行性が高く危険なものと推定される。なお、この病気は他国においても多発しており、隣国のシナではアジア・コレラという腹病が流行し、多くの患者が出ている模様である……。

ポンペが警告したように、この病気は患者数が二、三日のあいだに急増し、医師の手には負えなくなるほど感染力が強かった。また、多量の水様便と嘔吐を特徴とする病状から、ポンペはいち早くこれを世界的に流行している『コレラ』と診断したのである。

一方、通報を受けた長崎奉行の岡部長常もポンペの警告を躊躇なく受け入れ、コレラ対策に取り組んだ。半年前には天然痘を予防する牛種痘の製造や全国への頒布で大成功を収めているので、奉行のポンペに対する信頼は揺るぎないほどに高まっている。長常は、ポンペの警告や忠告に従って、コレラの治療と予防に関する触書（ふれがき）を作成し、長崎市街と領内の代官所に布告をした。触書の中身は、近頃流行っている病気は症状が急で、通常の医療では手遅れになる。大村町の医学伝習所には専門の医師が詰めているので、明日より昼夜を問わず申し出れば、医師が往診に出向く。ただし、病状が軽い場合には、病人が自ら伝習所に出向いて治療を受けること……といったものである。また、ポンペの指示に従って、食べてはならない食品としてイワシ、サバ、タコなどの魚類とカボチャ、キュウリ、ナスなどの野菜類を挙げ、さらに菓子や鳥肉、豚肉などを明示した。そして、医学伝習所の治療を受けて全治した者は後日、その旨を奉行所に届け出るようにとも命じている。

ポンペは、長崎奉行所の迅速な対応に驚嘆したが、それを褒（ほ）めたり驚いたりしている余裕はなかった。医学伝習所には助けを求める病人たちが次々に訪れ、ポンペはその対応にきりきり舞い。６万人の市民の中にあってコレラ病の専門家はポンペただ一人。誰もがみなポンペに助けを求めてくるが、

悲しいことに身体は一つ、一度に2軒以上の患家を往診することは出来ない。しかも、夏の真っ盛りのことである。寒暖計の目盛は体温に近い高さまで上昇し、汗が止むことは一時もなかった。加えて長崎は港のすぐ近くまで山稜が迫っていて、平地はほとんど無いに等しい。急坂や石段が多い町なので馬車は役に立たず、ポンペは馬か輿、あるいは徒歩で往診することになった。

その一方で、医学伝習所にも軽症患者が診察を求めて押し寄せて来る。ポンペは伝習所の敷地の隅に〝仮診療所〟を設けて対応するが、自ら診察をする余裕はまったくなかった。そこで、伝習所の生徒たちを集め、コレラ病の特徴と治療法を丁寧に教え込む。その教えにもとづいて、生徒らは患者の治療に没頭したが、ときには生徒の手に負えない患者も現れる。そのようなケースでは、ポンペが往診の合間に生徒たちの手助けをすることも少なくなかった。

休む間もない過酷な日々を送るうちに、今度は、ポンペ自身がコレラで倒れた。多忙な診療に区切りをつけて自宅に戻り、ベッドで泥のように眠っていた真夜中のことである。腹痛と便意で目が覚め、トイレに駆け込むと、激しい下痢便が続く。ふらつく身体でベッドに戻り、眠ろうとしたものの、すぐにまた便意に駆られてトイレに駆け込む。吐き気も強く、やがて下痢と共に嘔吐も始まった。ポンペはコレラ病に罹ったことを自覚して、キニーネや阿片を服用。ベッドに横たわるが、症状は一向に治まらない。

「このまま一人、異国の地で死んでしまうのか……」

その思いが脳裏をかすめたとき、玄関のドアが開き、人が入ってくる気配がする。いつの間にか夜は明けて、かなり時間が経っていた。

「ポンペ先生、大事ないですか！」

松本良順が声を掛けてくる。その後ろから何人かの生徒たちも声を掛けてきた。

「うむ、夜中の三時頃から下痢が……。どうやらコレラにやられたようだ」

力なく応えるポンペの腕に触れて脈を取りながら、良順は

ほかの弟子たちに指図をした。
「先生の体が冷え切っている。風呂を焚いて、湯船に熱い湯を満たせ」
「ありがとう良順。それから水が欲しい。出来れば湯冷ましの暖かいものを」
掠(かす)れ声のポンペの指示に従い、良順と数人の弟子たちは懸命な治療と看護に心血を注いだ。その甲斐があってか、ポンペの病状は徐々に回復に向かい、重湯や粥が食べられるようになってきた。朦朧としていた意識もしっかりしてきたが、そうなると、今度は自責の念が彼を苦しめる。
――自分の力が最も求められ必要とされるときに、よりによって重病を患い、ベッドから起き上がることすら出来ない。コレラなんぞに蝕まれたこの弱虫、役立たずが！
己の弱さ、不甲斐なさに心まで落ち込んでいた彼の邸宅に多くの人が駆け付けてきた。伝習所の生徒はもとより出島に住むオランダの同胞、奉行所の役人までもが治療や看病、支援に力を貸してくれる。
ポンペは、「相済まぬ」という気持ちに苛(さいな)まれながら、多くの人の援助で快方に向かっていく。そして、ベッドから起き上がり、ついに日常生活を取り戻す日がやってきた。彼はこのときの人々の友情、いや愛情のこもった援助に感激し、これまで日本でやってきたことが決して無駄ではなかった……という感慨をしみじみと味わっている。
ポンペは病魔に倒れてから13日後に起き上がり、再び乞われた患者の家に出向いていく。まだ身体はふらつき、体調は十分でなかったが、馬や輿に乗って診療に向かった。そうこうするうちにポンペの相棒で一番弟子でもある松本良順がコレラに罹ってしまう。激しい下痢と嘔吐に襲われ、良順は喘(あえ)ぎあえぎ師のポンペに往診を頼んだ。今度は元気になったポンペとその弟子たちが良順の寝所に駆け付け、懸命な治療と看護によって彼の命を救った。
ペリー艦隊に属するミシシッピー号が入港した直後に始

まったコレラの流行は凄まじい勢いで拡大し、一ヶ月後には大坂や江戸にまで広がっていく。この病気に罹ると激しい嘔吐、下痢が突然始まり、数日で死に至るため、民衆は頓死を表す「コロリ」と呼んで恐れ戦いた。

人々は僧侶や神主に頼んで加持祈禱や厄払いを行う、あるいは疫病退散のお札を戸口に貼って家に閉じこもる。逆にある者は街頭に出て神輿を担ぎ、鐘や太鼓を打ち鳴らすなどの大騒ぎをして病気を追い払おうとした。しかし、そのような行為が役立つわけはなく、流行が著しい江戸の死者は3～4万人にも及んだ。大量の死者により、〝焼場〟の前には棺桶の行列が出来て、辺りには異臭が充満、阿鼻叫喚地獄の様相を呈した。

畿内や江戸を越えて東北にまで広がった疫病は一向に収まる気配がない。それを聞いたポンペは、自ら行っているコレラ治療の指針を『ポンペ口述』として解説書に著した。これを松本良順らが日本語に翻訳し、幕府の後押しにより日本全国に頒布される。前述のキニーネと阿片の同時服用に温浴で体を温めるやり方である。この解説書は多くの医師の注目を集め、コレラ治療の手本となったが、予期せぬ事態を引き起こす。

江戸の民衆を恐怖に陥れたコレラの流行は大坂でも猛威を振るい、一万人をも超える死者が出た。しかし、コレラについての予備知識も治療経験もない医師たちは為すすべもなく狼狽えた。そこに『ポンペ口述』が頒布されたため、医師たちは競ってキニーネなどの薬を購入する。そのためキニーネは品薄となり、価格も高騰、またたく間に市場から姿を消してしまった。ポンペの治療法を踏襲したくても、薬剤が手に入らない。医師たちは、再びコレラの患者を目の前にしながら、匙を投げるほかはない状況へと追い込まれた。

この惨状を見るに見かねて果敢に立ち向った医師がいた。大坂で適塾を開いていた緒方洪庵である。彼は書斎に引きこもり、コレラに関するヨーロッパの医学書を手当たり次第に読み解き、数日後に『虎狼痢治準』という著書を緊急出版する。そして、薬不足を嘆く近隣の医師たちに無料で配布して、

ポンペの治療法が唯一無二のものではない……と警告を発した。

この出版に異を唱えたのは松本良順である。西洋の最新の医学を貶(けな)すものとして猛烈に緒方洪庵に抗議した。加えて、おなかの中で虎や狼が暴れるような激しい下痢を表す〝虎狼痢〟という表題は医師らしからぬ……という批判も洪庵の弟子たちから持ち上がる。それに対して洪庵は、急な出版のために説明不足があった旨を率直に詫び、自著の改訂に当たった。その中身を概説すると、コレラには3つ以上の病期があり、夫々の病期によって治療法や薬剤が異なってくる。冷えた体を暖めたり水分を補給したりする病期とそうではない時期、さらに薬剤も制吐薬や下痢止め、痙攣の薬などがあり、たとえキニーネが手に入らなくても治療法は幾つもあることを説いた。

洪庵は自著の中でポンペの治療法も病期によっては有効であることを示しており、決してポンペを軽視したわけではない。後年、適塾の塾頭であった長与専斎(ながよせんさい)が修学後に江戸に行きたいと言った時、洪庵は「江戸で学べるものは何もない、もっと勉強をしたいのであれば長崎のポンペに学ぶべし」と勧めたほど、ポンペを高く評価していたのである。

上海から長崎に侵入したコレラの流行は、七月下旬に下火となり、秋には沈静化をみた。しかし、翌年の夏に、長崎でも再びコレラ流行の兆しが現れた。４０年ものあいだ影を潜めていた〝コロリ〟が2年も続けて流行したことに民衆は動揺し、「外国人が井戸に毒物を投げ込んだのだ」というデマが行き交った。その容貌から一目で外国人と分かるポンペも、民衆の冷たい目に晒される。彼は食事をとる暇(いとま)もなく、身を粉にしてコレラの患者を診ていたが、命を救えない患者が続出することもある。そのような場合には、「医者は患者が治らない方が儲かるから直さない」とか、「奉行所が行っている衛生処置が間違っていて、かえって病気を蔓延させているのだ」と声高に非難する者が現れる。さらに興奮した民衆は、神輿や色々な神を担いで街中を練り歩くが、その行列に出くわす

ことは、外国人にとって危険を伴う。ポンペはそのような場面に2回も出くわしたが、幸いなことに群衆の中に知人(かつて往診して命を助けた患者)がいて、危機的な状況から逃れることが出来た。

一方、ミシシッピー号が長崎にコレラを持ち込む直前に、日米修好通商条約が、次いで蘭露英仏との条約が締結されている(安政5ヵ国条約)。その結果、多くの外国人が一斉に日本に入って来たが、それは奇しくもコレラの大流行と時期が重なった。そのため、「コロリの流行は日本が開国したせいだ」と吹聴する者が後を絶たず、外国人に嫌疑の目が向けられてゆく。さらに、この機に乗じ外国人を排斥しようとする攘夷運動の煽りを受けて、ポンペに対する風当たりは一段と激しさを増していく。

そのような逆境にあっても、ポンペは猛暑に汗を流しながら患者の家を次々に訪ね、その合間に大村町の仮診療所の医師たちを助けた。ところが、その道すがら出会う人々の目は冷たく、治療の甲斐なく患者が死亡した場合には怒声を浴びせられることもある。そんなとき、ポンペは救いようもない孤独と寂寥とに襲われた。

――遠い異国の地にあって、助けてくれる同僚もいなければ相談できる人もいない。そんなとき人間はどんな気持ちに陥るか、誰も分かってはくれないし、理解もできないであろう……。

それでも彼は挫けずに〝ただ自分に課された義務を果たすだけ〟と自らを励まし続ける。当時の集計によると、ポンペと彼の弟子たちが治療したコレラ患者の治療成績と、日本の医師たちの治療成績とのあいだには大きな差があった(死亡率36．8%に対し55．6%)。その卓越した成果を心の拠り所に、ポンペは自ら考え、行っている医療に揺るぎない自信と誇りを持って耐え抜く。

また、得体の知れない未知の疫病が流行った際に、民衆はどのような状況に陥り易いものであるか、ポンペには十分な予備知識があった。ヨーロッパでは原因不明の疫病が流行る度に、それを治せない医師たちは民衆の非難の的にされてき

た。その社会現象はどこの国においても共通であり、とくに大都会において著しくなる。実際に、四半世紀前のパリにおいては、数名の医師たちがセーヌ川に投げ込まれるという暴挙に晒された。そのような文明国における理不尽で常軌を逸した行動に比べれば、日本の民衆の反応の方が、まだ冷静さを失っていないとも言えた。

さらに、医学伝習所の学生たちの熱心な援助もポンペの心の支えになった。前年の流行で治療や予防の手立てを身に着けた学生たちは、身を粉にしてコレラ患者の治療に立ち向かって行く。そして、ポンペから適切な指導を受けながら、精一杯の努力を傾けたのである。

やがて、コレラの患者は減少し終息に向かっていくが、治療に没頭していたポンペは、民衆の感情が一変したことを不思議に思った。外国人を夷狄（いてき）と呼んで憎み蔑（さげす）んでいた人々が、急に穏やかな表情に変わり、道で出会うとポンペに会釈をする人も出てきた。どうやら恐ろしい疫病の終息によって、人々は冷静さを取り戻したようである。そして、以前の興奮や狂乱沙汰を反省し、実にばからしいことをしたものだと悟ったのであろう。

その後も、民衆は日を増すごとにポンペに友愛と感謝のまなざしを向けるようになっていく。それは長崎とその周辺にとどまらず、日本中の識者や医師たちにも広がり、深い情愛と感謝の誠をポンペに示すまでになった。そして、二回にわたる流行が全国的に終息した後には、将軍からポンペに恩賞として日本刀が一振り下賜されることになる。〝身に余る栄誉〟とポンペは喜んで恩賞を拝受したが、他にも多くの大名から高価な品々が贈られてきた。

幕府が、オランダの医師ポンペに恩賞を与えたということは、我が国の医学史において刮目（かつもく）すべき出来事と言える。何故なら、幕府は奥医師として漢方を偏重し、蘭方は原則として認めていなかった。それどころか、嘉永二年（１８４９）以降は、外科と眼科を除いて、蘭学そのものを禁止してきた（蘭方禁止令）。そのような幕府の締め付けに対し、安政五年の春には蘭方医８３名が出資をして〝お玉が池種痘所〟を開設。

次いで、将軍家定が危篤状態に陥った七月には、蘭方医の伊東玄朴が将軍の病床に呼ばれるという椿事が起こった。事業家としても有能な玄朴は、「私一人だけで将軍を診る訳には参りませぬ」と蘭方医の戸塚静海、脚気の治療に長じた青木春岱、遠田澄庵を江戸城に呼び寄せ、一気に4名を奥医師に認めさせた。その後も数名の蘭方医を奥医師に推挙して、漢方医が独占してきた幕府の奥医師に数多くの蘭方医を参入させている。

恐らく、ポンペに与えられた恩賞も、伊東玄朴らの進言に依るものに違いない。ポンペの先輩医師ともいえるシーボルトの弟子であった玄朴らは若いポンペを高く評価していて、玄朴は養子の〝玄伯〟を、林洞海は子息の〝研海〟をポンペの許に留学させているほどである。

八、死体解剖

コレラの大流行により、医学伝習所における講義は暫くのあいだ中断せざるを得なくなった。ポンペは、乞われるままに患者の家を訪問し、伝習所に帰ってくると仮診療所で治療に携わる医師たちを手助けする。食事も満足にとれない日々が続いたが、生徒の中には講義の継続を望む者もいた。そのような生徒に対して、ポンペは「講義や学問より、患者を救うことの方が優先するのだ」と強く言い聞かせる。

暑い夏が過ぎ、コレラの流行が一段落すると、ポンペは再び講義を開始した。開講当初の物理化学や、幕府から要請があった鉱物学・採鉱学の短期講義も終了し、繃帯学（ほうたいがく）に関する教育もほぼ終わりに近づいている。この繃帯学に、学生たちは大変興味を示したが、その理由はポンペが外科医として実際に使っている繃帯を準備したためである。とりわけ、〝糊付き繃帯〟および〝ギブス〟を初めて目にした生徒らは驚愕の表情で講義を聞き、具体的な使い方を熱心に学んだ。さらにポンペは、外科治療に用いる多種多様の繃帯具一式を教壇に並べて、その使途を詳しく伝授してゆく。熱心に聞き入る生徒たちの真剣な表情を見ながら、教師のポンペもまた確

かな手応えを掴んでいた。長丁場の医学伝習、それも基礎の自然科学からの積み重ねにおいて、生徒は理論だけでは興味を失いがちになるが、この実際面に即した繃帯学の授業は、生徒の外科医学への熱意を高めるのには大変効果があることを確信したからである。

それとは逆に、授業の進行を阻み、ポンペを困らせている科目があった。彼は、解剖学を特に重視し、伝習所が開設された当初から週に3回、火・木・土の午前にその講義を行ってきた(伝習所における暦は陽暦が用いられた)。その解剖学の教育においては〝死体解剖の実習〟が極めて重要になるが、開講から長い月日が経っても、未だに実施されていないのである。

この〝死体解剖〟については、ポンペが日本に着任した当初から、出島の商館長であったドンケル・クルチウスを通して長崎奉行や幕府に申請をしてきた。解剖実習の必要性を説いて、死体の提供を再三再四、要望し続けたのである。その努力が実を結んで、申請から1年近くが経過した安政五年の八月に朗報が届いた。長崎奉行所から「江戸からついに腑分けの許可が下りましたぞ」という連絡があったのである。ポンペは大喜びをしたものの、それも束の間。いくら待っても次のステップ、具体的な実施日や場所については何の沙汰もないのである。ポンペが、幾ら催促をしても、奉行所は煮え切らない返事を繰り返す。「また、日本の役人特有の有言不実行か」とその都度、憤慨してきたが、ポンペの焦燥は日を追う毎に募るばかり。

そのような焦燥を抱えながらも、ポンペは解剖学の教育を疎(おろそ)かにしたり、手抜きをしたりすることはなかった。講義に必要な解剖学の医学書や掛図は、オランダから十分に持ってきている。さらに、着任した後にも、パリから紙製の精巧な人体模型である『キュンストレーキ』を取り寄せた。この模型は、外側から紙を剥がしていくと筋肉や内臓が現れる仕組みになっていて、人体の構造を知るには実に都合が良くできていた。しかし、この人体模型がいかに優れたものであっても、生徒がこの模型だけで解剖学を習得することは無理なこ

とである。

――人体各器官の構成について優れた、かつ純粋な概念を得るためには、実物をよく見なければならない。そうしなければ、生徒の医学知識はいつまでたっても不十分なものとなってしまう……。

そう思うポンペは、死体解剖の実現を求めて、講義の合間に何度も長崎奉行所の西役所に足を運んだ。そして、ポンペをよく理解し、協力を惜しまない奉行の岡部長常に直訴する。

「お奉行殿、このままでは日本に一人前の医師は育ちません。とくに外科は死体解剖の修練なしでは手術が出来ない医者になってしまいます」

「ポンペ殿、辛辣なことを申されるな。ワシとて貴殿の役に立つようにと、精いっぱい努力をしておるのじゃ」

「しかし、私どもに死体が提供される話は未だにありません。去年、幕府が腑分けをしても良いと許可したのは、口先だけのことですか？」

「いや、世相が悪いのじゃ。外国から来られた貴殿が、日本人の死体にメスを入れることに強い反発があり申してな」

「そんなことを気に掛けてはなりません！　何処の国でも、新しいことをしようとすれば必ず民衆は反対するものです」

「貴殿がそう申されても、騒擾（そうじょう）になれば黙って見過ごすわけにもいかぬし……」

「何を躊躇（ためら）っておられるか！　後日、医学伝習所の生徒が一人前の医師になれなかったと批判されても、私の責任ではありませんからね」

ポンペは、奉行や役人と面会するたびに強引ともとれる言葉で死体の提供を催促する。

また、相棒の松本良順も、江戸における親しい医師や有力者に文を送って、死体解剖の実現に向けた工作を繰り返していた。名目上の許可だけでなく、実際に死体が提供されるようにと、幕府への働き掛けを強めていたのである。

ところで、幕府が何故、ポンペの死体解剖に難色を示しているのか、その理由を探ってみよう。周知のようにポンペが来日した翌年に米国、次いで蘭露英仏との修好通商条約が結

ばれる。その中身は、外国の武力に恐れをなした幕府が、帝の勅許を得ないままに締結した不平等条約であった。これに対し、幕府の独断専行や弱腰外交を批判する運動が盛り上がり、国内は外国人を排斥する攘夷論で沸き上がっている。その騒然とした世相の真っただ中で、たとえ罪人の死体であっても、野蛮な外国人に腑分けをされることは容認できない、日本古来の習慣や宗教上の理由からしても許されることではない……という国民感情が津々浦々にまで蔓延していた。

ポンペが奉行所に足繁く通い、死体解剖を繰り返し要求しても、役人たちが明言を避け、実施を認めようとしなかった裏には、この攘夷運動の高まりにあったと言えよう。

夏が過ぎ、涼しい秋風が吹き始めたある日、思わぬ情報がもたらされた。ポンペが解剖学の講義を終えて教材を片付けていた時のことである。何人かの弟子たちがポンペのそばに寄って来て、そっと耳打ちをする。

「先生、数日後の八月一三日に、死刑がある模様です」

「それがどうした、死刑は何時だってあるであろう」

「ところが、今回は解剖の許可が出そうなんですよ」

「えッ、本当か？　しかし、何故、私のところに話が来ないのだ？」

「多分、話が漏れると大騒ぎになることを恐れているのではないかと……。ですから、この話は内々に願います」

「分かった。後で松本君から話を聞こう」

ポンペは、当事者の自分に連絡が無いことに不満を抱いたが、きっと複雑な事情があるに違いないと考え、平静な態度を保った。

その日の夕方、松本良順が息を切らせてポンペの家にやってきた。良順が言うには、数日前に奉行所の永井という役人から、「近日中に、斬に処せられる罪人があり、無籍者であるため、願い出があれば腑分けも可なり」という書面が届いた。良順は、その永井という役人に面会を求め、今日やっと会うことができたという。

――斬首の刑に処せられるのは、下役人の屋敷で働く平三

郎という使用人。主人の預かり金をくすねた罪による刑で、前科者でもある。刑の執行は八月一三日(陽暦九月九日)で、腑分けについてはお奉行様も仔細ご承知である故、願い書を出すように……。

詳しい話を聞いた良順は、嬉々として西役所を飛び出し、その足でポンペの許に駆け付けてきた。ポンペも、熱望し続けた解剖実習がいよいよ実現することを知り、喜びを隠すことが出来ない。

ポンペと良順は、早速、地元の医師や通詞たちを呼び寄せ、来るべき死体解剖の準備を進めた。解剖の場所は西坂近くの、海に突き出た岩場の上に決め、そこに8メートル四方の解剖室を設置。医師以外のものは立ち入りが出来ないように周辺を防備し、水や火も使えるようにする……。その構想に沿って解剖小屋の設営を始めると、奉行所の下役人たちが騒ぎ出した。

異を唱えたのは、ごく一部の役人であったが、なかには街頭に出て腑分けの情報を流す者も出てきた。良順は、死体解剖の阻止にとどまらず、ポンペの身に危険が及ぶことを危惧して、その旨をポンペに直接伝えた。

「松本君、私はどんな妨害に遭ったとしても挫けはしないぞ。反対する群衆を掻き分けてでも解剖所に向かい、断行する所存でおる」

「ご決意はよく解っておりまする。されど、先生には出来るだけ目立った動きをなさらぬようにお願いしたい」

「であれば、如何に振舞えばよいのだ?」

「先生にはご自宅に留まっていただき、街なかには出ないことです」

「それで、解剖の当日は?」

「死体が手に入りましたら、すぐにお知らせに上がります。先生は何も知らぬ顔で、解剖場に真直ぐ向かってくだされ」

「うむ。もし、行く手を阻む者が現れたらどうする?」

「その時は、私は将軍家の依頼で医学を伝授しに来たものである。医学を学ぶものは書物だけに頼っていてはならぬ、解剖なくして医学教育などあり得ない。もし我が行く手を阻む

者があれば、奉行に直接会って報告をする。後で如何なるお咎めを受けても知らぬぞと、大声で言ってやりなさい」
「わかった。君が言うようにしよう」
ポンペの了承を取り付けた良順は踝(くびす)を返し西役所に続く石段を一気に駆け上った。
「お奉行様、ポンペ殿には自宅謹慎をお頼み申し上げ、先刻、了承を取り付けました」
「ご苦労であった。ワシからは、〝腑分けの場所には誰も入れてはならぬ。もし、立ち入らんと望む者は松本良順の許可を得るように〟と警護の者たちに命じておく」

陽暦九月九日の早朝、桜町の獄舎で斬首に処せられた遺体が棺桶に入れられ、数名の獄吏に護られて西坂に向かった。解剖小屋が建てられた岩場の周りには１５０名ほどの役人たちが配備され、警固が厳重な出入り口では許可書がない者の立ち入りは一切認められなかった。
ポンペは、準備万端調ったとの知らせを受けて、朝の七時に自宅を出た。愛馬に跨(またが)って解剖所に向かったが、街路に人影はまだ疎らで、行く手を阻む者も現れない。ただ、解剖小屋に近づいたとき、武具に身を固めた警備の人群れが目に飛び込んできた。ポンペは何も知らされていなかったので、〝これは自分に対する嫌がらせに違いない〟と受け止めた。解剖に異を唱える者たちが束になって、「死体解剖は今すぐに取止めよ！」と抗議しているように映ったのである。もちろん、それはポンペの誤解に過ぎなかったが、日本人の心情や攘夷思想をよく理解できない彼にとっては、すべてが死体解剖に反対する動きに見えたのである。
心穏やかならぬものがあったが、ポンペは怯むことなく馬から降りて、にわか作りの解剖室に入った。その中央に設置された解剖台には、斬首に処された囚人の体部と頭部が並べられ、その周りを生徒や地元の医師たちが取り巻いている。近くにいた生徒に訊ねると、見学者は全部で４５名であるという。午前八時頃に、術衣に着替えたポンペは解剖台の脇に立って、見学者一同に話しかけた。

「解剖実習では、その目的とするところを一時たりとも忘れてはなりません。心に銘記すべきは、死体は科学的研究のために供されたものであり、真面目な態度で実見し、実習に当たらなければなりません。冗談や無作法な振舞いは死者を冒涜するばかりか、医師の品位を落とす行為であります」

この言葉は、生徒たちの心の奥に突き刺さり、私語や雑談をするものは一人もいない。見学者が固唾を呑んで見守る中、ポンペは死体の胸部と腹部を一気に切り開いた。そして、胸部の心臓と肺、横隔膜で仕切られた胃と腸、肝臓などの位置とそれらの相互関係を丁寧に説いていく。次いで肺を切り出して全員に見せた後、生徒らに触らせて、その感触や質感を確かめさせた。

胸部が済むと胃や肝臓、脾臓、すい臓へと切開を進める。その途中で質問が出ると、ポンペは生徒が納得するまで丁寧に教えていく。ポンペは、これが最初で最後の解剖になるかも知れないという思いでメスを握っていたのである。

胸部と腹部が終わると、ポンペは右腕の解剖に取り掛かった。筋と関節とを繋ぐ腱、動脈と静脈の走行などを見せた後、志願する生徒に左腕の切開を指示。初めて死体にメスを入れる生徒たちは戸惑うこともなく、与えられた腕を切り開いていく。２年近くもの講義を通して習得した知識がここで大いに役立ったのである。

実はこの時の解剖が、日本における〝医師の手による死体解剖〟の始まりであった。記録では１７５４年に京都で山脇東洋が、１７７１年には杉田玄白らが江戸府下の小塚原で腑分けをしたとされる。しかし、実際に執刀したのは斬首刑の執行人であり、医師たちは処刑人が腑分けをするのを実見して、中医(中国医学)の五臓六腑説やオランダ書籍の解体図が正しいか否かを確かめたに過ぎない。

熱のこもったメス捌きと丁寧な説明のため、時間はまたたく間に過ぎて夕暮れが迫ってきた。暗闇の中では解剖が出来ないので、松本良順らが西役所に走った。死刑囚はその日のうちに埋葬する決まりであったが、それを1日だけ延長してくれるようにと奉行に請願したのである。

翌朝の死体解剖は、足部から開始された。ポンペは鼠径部（そけいぶ）にメスを入れ、大腿部から下肢、さらに足首から足指へと開いていく。片足を解剖した後は、前日と同じように志願する医師たちに対側の足を切開するように命じた。この日も瞬く間に時は過ぎて、頭部を切り開いて幾らも経たないうちに時間切れとなった。ポンペは、脳と目や耳の解剖を取り止め、それらをアルコール漬にして医学伝習所に持ち帰ることにした。

解剖を終えた遺体は、夕方の六時頃に荼毘（だび）に付され、拾われた遺骨は骨壺と木箱に納められた。翌日、西坂に近い本蓮寺で僧の読経と戒名を授け、さらに建碑と永代供養の手続きが執り行われる。通常、刑に処せられた死体は、読経などの葬式もなく、町外れの墓地にひっそり埋葬される。しかし、今回の罪人の場合は、従来のしきたりを破って丁寧な読経と埋葬が執り行われ、戒名まで与えられたのである。

その陰では、松本良順と長崎奉行の岡部長常が必要な手を打っていた。牢屋の番人を通して、死刑囚に死後の手厚い葬儀と埋葬の話を言い聞かせ、静かに刑に服すように仕向けたのである。同時に、その様子を他の囚人たちに伝えて、殺気立った囚人たちの心を静めさせた。さらに、死刑執行後は罪人の戒名を大書して獄舎内に張り出し、受刑者との生前の約束を履行したことを明示する。長崎奉行長常の聡明な処置により、騒動を起こしかけた囚人たちは己の行いを反省し、それ以後は献体を遺言する死刑囚も現れるようになったという。

２回目の死体解剖は、それから２ヶ月後の陽暦一一月七日に行われる。その時の見学者は６０名を超えていたが、ひときわ目を引いたのは紅一点、女医が参加していたことである。その女医とは、シーボルトの娘〝お稲〟であり、彼女は３ヶ月前に罪が解かれて再来日した父シーボルトの仲介で解剖実習への参加が認められた。お稲はポンペの解剖を熱心に観察し、メスを握る実習にも志願する。その途中で鋭い質問を幾つかポンペに投げ掛けてきたが、彼女の聡明さがよく伝わってくる応答であった。

その後も死体解剖は続けられたが、解剖が可能な死刑囚の数には限りがある。そこでポンペとその生徒たちは代用の牛の頭を西洋人の肉屋から買ってきて、目や耳などを切開する。その際、牛の脳は屠殺時に破壊されて役に立たないので、犬や猫などを用いた解剖が繰り返された。

ポンペは医学伝習所も後半に差し掛かった外科学の実習で多くの生徒に手術をやらせたが、その中で唯一人、ポンペが舌を巻くほど腕の立つ外科医がいた。それは佐藤尚中（たかなか）、松本良順の義兄であり、お茶の水の順天堂医院の初代院長となる生徒である。ポンペは、尚中の非の打ち所のない手術振りを目にして、彼は恐らく数えきれないほど多くの犬や猫を見えないところで解剖して腕を磨いたに違いない……と推測している。

九、盟友を見送り、日本に残留

二回目の死体解剖を終えたポンペは、愛馬の手綱を握って出島の邸宅に戻って来た。しかし、その出島には、二年と二ヵ月ものあいだ苦楽を共にしてきた第二次派遣隊の仲間たちは居なかった。ポンペが、西坂の解剖所でメスを握った日の三日前に、海軍伝習所の教師団は、その役目を終えて帰国の途に就いたのである。隊長のカッテンディーケをはじめトローイエン、ヴィッヘルスらの将校、下士官、水兵らは商船ポスチロン号に乗って長崎港を後にした。安政六年十月十日（陽暦十一月四日）のことである。

第二次派遣隊が母国に引き上げた後も、ポンペは医学教育を続けるため、日本に残ることを決意。ほかには飽の浦（あくうら）鉄工所の建設を進めていたヘンドリック・ハルデスと部下の技術員、警備員が長崎に留まり、製鉄工場の建設を続けることになった。日本残留を決めた四人は、第二次派遣隊との別れを惜しんで咸臨丸に乗り込み、大勢の伝習生たちとともにポスチロン号の後を追った。そして、バタビア経由でオランダに向かう第二次派遣隊を港外まで見送り、7発の礼砲を放って一行の平安な航海を祈った。

この第二次派遣隊の突然の帰国は、幕府から海軍伝習所の継続を強く要望されていたオランダにとっては寝耳に水のような話であった。では、何故、海軍伝習所は閉鎖されることとなり、第二次派遣隊は母国に引き上げることになったのであろうか？

話は、カッテンディーケが率いる第二次派遣隊がオランダに引き上げた前年のことに遡る。オランダの弁務官ドンケル・クルチウスは日蘭通商条約を結ぶため、駐留地の長崎を発って江戸に赴いた。そこでクルチウスは、三年前に開設した長崎の海軍伝習所から教師団を引き上げた方がよいのではないか……という考えを幕府に提起する。その要旨は、日本が鎖国を解いて米国、次いで露英仏と修好通商条約を結ぶことになれば、日蘭関係も以前のようにはいかなくなる。とりわけ、オランダが「海軍伝習」と称して日本人に軍事教育を施しているのは〝日本をけしかけて敵対行為を取らせるためである〟と英米その他の国から誤解されている。このまま海軍伝習所を存続させれば、日本と諸外国の関係はますます険悪なものになるばかりか、オランダにとっても由々しき問題を引き起こすことにもなりかねない。その様な懸念があるため、海軍伝習の教育団派遣は取り止めて、〝有志による篤志参加〟としてはどうか……と献策をしたのである。

提言を受けた幕府は、クルチウスの申し出を無下には断れず、協議が続いた。その協議では、「提案を受け容れるほかはなかろう」という意見が大半を占めたが、財政のひっ迫問題も抱えていたので、大勢は次第に〝海軍伝習所は廃止〟という方向に傾いていく。

他方、クルチウスも日蘭通商条約締結後に長崎に戻り、隊長のカッテンディーケや将校などの幹部を集めて幕府との会談の模様を報告する。クルチウスは、日本の開国とその後の通商条約締結を見越して、オランダ政府が日本に送り込んだ優秀な外交官である。そのクルチウスは、ペリーの武力による開国の強行と、その後の不平等条約の締結、さらに追随する英露仏などの動きを見て、海軍伝習所の廃止を幕府に提案したのである。しかし、その複雑な国際情勢と急激な環境

変化を、長崎に留まる派遣隊幹部はよく理解できないでいた。クルチウスが幾ら丁寧に説明をしても、幹部たちの理解は上辺だけで、納得のいくものではなかった。まして、下司官や水夫に至っては海軍伝習所の閉鎖は想像もつかぬことであり、日々訓練に励む伝習生たちにとっても同じでことである。

隊長のカッテンディーケや将校たちは、今後の海軍伝習所の在り方について戸惑い、何度も協議を重ねた。しかし、簡単に結論が出せるような問題ではない。そこで、隊長のカッテンディーケはバタビアに宛てて日本の現況や複雑化した国際情勢を伝え、総督府からの指示を仰ぐことにした。

オランダ船が数多く入港する夏を迎えたが、総督府からの指示文書は中々送られては来ない。海軍伝習所の今後に不安を抱えながらも、第二次教師団は流れる汗を拭いながら、何時ものように生徒を指導していた。その奉行所西役所に突然、長崎奉行の岡部長常が数人の部下を伴ってやってきた。奉行の長常らは、諏訪神社に隣り合った立山御役所からやって来たのである。そして、その場に居合わせた隊長のカッテンディーケや将校たちを教官室に集め、硬い表情で口を開いた。

――貴国のご助力のお陰で、我が国の蒸気船の操縦技術も格段の進歩を遂げていると思われ、ここに厚く感謝を申し述べる。左様に成果は上がっているものの、諸般の事情から伝習生一同を近々江戸に引き揚げさせねばならぬことと相成った。貴国の教官殿もまた、オランダに帰国して頂かねばならぬこととなり申した。ただし、咸臨丸の修繕、製鉄所の建設、医学の教授等については、江戸から何分の沙汰があるまでは、これまでと同様に続行せられても構いませぬ……。

海軍伝習所の誰もが想像もしなかったこの通告に、教師団の面々は一様に不快感を抱いた。伝習生の技量は向上したし、何でも自力でやらなければ気が済まないという日本人の通性から、「もうオランダ人の援助も教育も要らないから引き上げてくれ……」と身勝手に契約解除をしてきたと推測したのである。それに加えて、幕府の財政がひっ迫している折に、長崎での海軍伝習が莫大な費用を要するため、この唐突な決定がなされたと考える教官もいた。さらに、事態を察知した

伝習生の中には、「これはきっと大老井伊直弼（なおすけ）の差し金であろう」と怒りをぶちまける生徒も出てきた。井伊直弼は保守派の領袖（りょうしゅう）であり、日本人が西欧の文化になじみ、染まっていくのを快く思っていなかったからである。

海軍伝習所の教官や生徒らの憶測は、大筋において間違ってはいなかった。幕府は二年前に、江戸の築地講武所の中に軍艦教授所（後の軍艦操練所）を開設している。その総監には第一次海軍伝習所の目付であった永井尚志が就き、そのとき伝習所で教育を受けた生徒を教官に仕立てている。この和製海軍伝習所の創設については、オランダに事前の相談や連絡もなく、いわば秘密裏に事を運んだ経緯がある。その狡猾ともとれる幕府のやり方は、オランダ側に江戸幕府への不信感を抱かせた。そして、今回の海軍伝習所の突然の廃止と第二次派遣隊への契約解除の帰国要請も前例と同様に、否、それ以上にオランダ側に不信を募らせた。

長崎奉行の岡部長常から海軍伝習所の廃止通告があってしばらくの後に、バタビアからの船が長崎に入港。その船で届いた総督府からの指示は、「海軍伝習を即刻廃止し、契約期間満了を待たずに、第二次教師団は引き上げること」であり、次の内容が付記されていた。

――幕府の求めに応じて残留しようとする有志がいれば、その者はもう一年日本に留まっていてもよろしい。ただし、本国の海軍大臣より、何らかの命令が下ったときには、直ちに命に従わなければならない……。

総督府からの指示を受けて、隊長のカッテンディーケらはそれまでの海軍伝習を取り止め、帰国の準備に入った。余りにも突然、かつ伝習途中での廃止通告であったため、派遣隊のメンバーは落胆し、腑に落ちない面持ちで帰国の準備を調える。そして、たまたま長崎に寄港していた商船ポスチロン号に乗り込んでオランダに引き揚げていった。

その一方で、ポンペが教育を続ける医学伝習所は、長崎奉行の岡部長常の尽力もあって、そのまま継続することが決まった。医学伝習所の生徒たちは、夫々が所属する藩主の許可を得て居残るが、ここで問題となったのは、ポンペの片腕と

なって医学伝習所を切り盛りしてきた松本良順の処遇である。海軍伝習に加わった幕臣の勝麟太郎や榎本武揚らは江戸に戻るが、松本良順もまた幕臣の一人である。海軍伝習所の閉鎖により長崎に留まる理由がなくなり、経済的な後ろ盾も失う。そこで、長崎奉行の長常は嘆願書などの策を講じ、良順が医学伝習所には欠かせない人物であることを江戸幕府に訴求して、大老の井伊直弼から次のような指示を取り付けることに成功する。

——大老の職にある者が医学生一人の処置を忘れたとて、法的に何の問題があろうか。留学費やその他一切を従前の通りとせよ……。

保守派で、西洋の文化や学問を嫌っていると思われた井伊直弼が、松本良順の長崎留学については黙認をしたのである。かくして、西洋の文化や科学技術を積極的に取り込もうとする長崎奉行岡部長常の努力は報いられ、医学伝習所は何事もなかったかのように存続することになった。

ポンペを支えてきた松本良順が医学伝習所に留まることが決まり、ポンペはホッと胸を撫で下ろす。しかし、オランダから共にやってきた気の置けない仲間たちはもう出島にはおらず、彼の身辺は急に寂しいものになった。母国から遠く離れた異国の地に一人でいれば郷愁の念に駆られることも少なくはない。そのようなとき、ポンペは共に長崎に留まっているハルデスに会って、懐かしい郷里の思い出や互いの仕事についてよく話すようになっていく。

幕府からの要請があったとはいえ、二人が自ら日本に残ることを志願し、仕事を続けるからには、それ相当の事業や任務があった筈である。ポンペの場合は、ヨーロッパの進んだ医学を日本人に伝えることであるが、技術将校のハルデスの場合は一体、何を為そうとしていたのであろうか。

ハルデスが取り組んでいたのは、大型船舶の点検や補修、その際に必要な部品等を製造することができる製鉄工場の建設であった。そのような工場建設の計画は、第一次派遣隊の伝習時に持ち上がり、実施は後を継ぐ第二次派遣隊に引き継がれる。計画を託された後任の隊長カッテンディーケは、

工場の建設を担える人材を探して、技術将校のハルデスに白羽の矢を立てた。もちろん、ハルデスは隊長からの要請を快く引き受け、ポンペらと共にオランダを発った。そして、ヤパン号が日本に到着すると、休む間もなく工場建設に着工。我が国で初めてとなる製鉄工場の建設は、開明的な考えの持ち主である長崎奉行岡部長常の主導で開始されることになる。

ハルデスは、真っ先に港湾内を詳しく調査して、浦上村の飽の浦に目を付けた。そこの沼地を干し上げて整地し、軟弱な地中に数千本の杭柱を打ち込んでいく。基礎工事が完了すると、彼はそこに蒸気機関と製造工業のための工場をうち建てた。建屋の構築と同時に、ハルデスはオランダから最新の工作機材を取り寄せ、独力でそれらを組み立てていく。その途中で、第二次派遣隊は引き上げるが、その後に完成した工場にはナズミス社製の蒸気ハンマーが絶え間なく動いている。〝ナズミス〟とは、スコットランドの技術者の名で、彼は１８３４年にマンチェスターに工場を創設、３９年に蒸気ハンマーを発明後、平削盤、杭打機械など数多くの発明で知られる人物である。

最新の工作機械に加え、ハルデスの工場には１２基もの大鍛治場があって、鎔鉱炉は始終稼働している。ドロドロに熔けた金属を鋳型（いがた）に流し込んで、様々な器物を創り出す鋳造（ちゅうぞう）の全過程も、この作業場を見れば一目瞭然。さらに旋盤や鋳造品を円錐形に切り出す新式の工作機も蒸気の力で回転している。この工場では、蒸気力を備えた器械や重々しい鉄の部品は何でも作り出せたし、高圧に耐える蒸気罐（じょうきかま）（ボイラー）さえもが造られていた。

ハルデスは鉄工所の建設に留まらず、日本人技術者の養成も怠ることはなかった。幾ら優秀な工場を打ち建てても、それを動かす〝人〟がいなければ意味をなさない。幕府もその辺は心得ていて、ロシアのプチャーチンのために西洋式帆船の戸田（へだ）号を造り出した船大工の上田寅吉らを海軍伝習所に送り込んでいる。しかし、船大工といっても、蒸気機関の構造や仕組みについては何も知らず、蒸気の力で動く器械や、

それらを造り出す工作機械も見たことがない。ハルデスは無知同然の船大工や鍛冶職人たちを相手に、理論的かつ実際的な教育を工事の合間に授けていく。その地道な取り組みにより、彼は長崎に優れた技術家集団を育て上げ、日本人による蒸気船の運航に留まらず、点検・補修などのメンテナンスをも可能にしていった。

ハルデスと共に日本に残ったポンペは、後に多くの国から来た技師たちを連れて、この飽の浦鉄工所を訪問している。それらの技師たちは、誰もがみな口を揃えて「ここに最新式の工場設備があるとはただただ驚くほかはなく、これ等のすべては巨人が成し遂げた事業である」と称賛の声を上げた。ポンペは日本に滞在しているあいだ、ハルデスの仕事ぶりに目を見張り、彼に対する尊敬の念を抱き続けた。そして、日本に最新の製鉄工場を建設する指導者として、「彼に勝る教師は他にいない」と絶賛の言葉を惜しまなかった。

製鉄工場がほぼ完成に近づくと、今度は埠頭の必要が生じてきた。貨物や石炭を積み込むため、また船体の修理のために、大型船が接岸できる埠頭である。しかし、そのためには１０メートル以上の水深が求められ、その深さに達するためには６０～９０メートルの突堤を湾内に建造しなければならない。ハルデスはこの大きな仕事をも自ら果敢に手掛けていく。埠頭の造成に取り掛かると、彼は数ヶ月のあいだ潜水函に身を潜めて長い時間を過ごし、ある時は水中に潜って、重い石の沈下粗朶(そだ)をその場に沈めて突堤の基礎を作り上げた。ハルデスが長崎港内に造設したこの製鉄工場と埠頭、それらを動かす技術者の養成は極めて大きな事業であり、日本にとって記念すべきものとなった（明治維新後、飽の浦鉄工所は長崎造船所に改名、その後は岩崎弥太郎に払い下げられ、三菱重工業長崎造船所へと発展する）。

飽の浦製鉄所は着工から3年と少しで竣工したが、軍艦や商船を持つ国々にとって、この工場は重大な意義を持つものとなった。それまでは、修理のためにヨーロッパまで帰らなければならなかった船が、日本の長崎で、数週間も経ない

ちに完全に修理が出来るようになったのである。そうなれば、長崎港に寄港する船は必然的に増えてくる。加えて、工場には貯炭所も併設されていたので、石炭の入手も可能となった。その石炭の価格は、シナで買うイギリス炭の3分の1であったため、シナ海を横断する汽船は競うように長崎に寄港して、廉価な石炭を買い求める。中には、破損した船体の修理を目的に、長崎にやって来る船舶もあった。

外国船の寄港や修理目的の滞在が増えると、ポンペの身辺も一段と慌ただしくなってきた。外国船が入港するたびに、怪我をした船員や病人たちがポンペのもとにやってくる。また、米英露などの国々は、日本に外交官や軍人などを送りこんでも、医師の派遣までは手が回らない。そこで、江戸や横浜で大怪我をしたり重い病気にかかったりすると、ポンペを頼って、はるばる長崎にまでやってくる。さらに、噂は海外にまで広がって、上海から到着した船に、ポンペの診察を目的に乗り込んできた患者も現れた。

ハルデスが造成した飽の浦鉄工所の影響を受け、ポンペの毎日は息をつく暇もないほど忙しくなっていた。百名以上もの生徒たちに医学教育を伝授するかたわら、外国人はもとより、日本人の患者も身分や貧富の分け隔てなく診察する。さらに、船体の修理で長期滞在をしていたロシア軍艦の水兵たちが引き起こした問題行動への対処についても、長崎奉行の長常から相談を受けて適切に対応。若いポンペは持ち前の情熱とバイタリティーを存分に発揮して、解決へと導いていく。

〈以下、次号〉